

子宮頸がんワクチンの定期接種再開反対集会に行ってきました。

2014年2月6日衆議院議員会館で行われました。会場は、被害者、支援者、報道人で満杯、資料も追加印刷する程でした。

昨年6月に定期接種推奨が一時中止となった子宮頸がんワクチンですが、今年1月の検討会で「ワクチン接種後の痛みの原因は心身の反応によるもの」と結論付けられました。

このまま、定期接種再開で問題ないのでしょうか。

12月の調査結果報告書を読まれた方もいると思いますが、調査の対象となった症状を、世界の文献と照らし合わせるだけで、被害の実態に迫った調査がされているとは言えません。

しかし、そんな調査で「心因性」「痛みのフォロー強化が現実的な課題」と結論付けられ、定期接種再開の圧力が大きくなってきています。産婦人科学会などから「勧奨中止が続けば十数年後には日本だけ子宮頸がんの患者が多い国になるだろう」という声明がだされています。

16歳の少女が、途中、痛みと不随意運動で何度か退座しながらも被害を訴えていました。「痛み、失神、勝手に動く身体で部活も、学校にも行けなくなった。医者は精神的なもの、忘れなさいとしか言わない。身体的にも精神的にも辛いです」

たった16歳の彼女が心身の辛さを押しでも訴えたかった思いに、涙をとめられませんでした。

そもそも子宮頸がんって？/ワクチンは効くの？

子宮頸がんは、子宮頸の基底細胞(粘膜細胞に分化)がヒトパピローマウイルス(以下HPV)の持続感染によって、異型化、更に癌化しておこる癌ですが、感染してもその9割は免疫力などで自然淘汰され、残り1割だけが感染後10数年かけて癌化します。

また、検診での発見率も高く、早期では出産に影響のない治療が受けられます。英国の調査では検診率上昇に伴い、子宮頸がん発生率が減少しています*。

一方、HPVワクチンは、侵入したHPV(2or4種の遺伝子型のみ)の局所感染を一生防ぎ続けることが目標ですが、何十年も有効かどうかはわかっていません。このワクチンは子宮頸がんワクチンとされていますが、HPV感染予防(するかもしれない)ワクチンという名称がより正しいのかもしれない。



それでもワクチンで癌が予防できるのは素晴らしいことです。ワクチンの副反応による被害調査でも「心因性」と判断されましたし、WHOからも、米国、豪、仏などの調査でより、副反応の発現率とワクチン接種の関連性は低く、ワクチンの安全性に問題は無いと報告されました。

やはり安全なのでしょうが？

あれ？WHOで挙げられた国をよく見ると、発現率の分母が出荷数でしか把握していない国ばかりです。実際の接種者数で管理しているアイルランド、蘭、英での調査では、十万人あたりの副反応報告数は、先の国々との比較で、その5~7倍になっています*。安全とは言い難いものを感じます。

また、日本の調査でも、医療機関の自発報告調査と臨床試験調査では自発報告の方が著しく低くなっています。今回のように自発報告だけの調査では不十分であることは明白です。



定期接種の積極的推奨再開の前に、被害実態調査の実施を強く感じます。

一部の自治体では独自に実行しており、鎌倉市では調査結果をHPに掲載しています。集会でも、調査のやり方はいくらでもお伝えすると言っていました。

私たちも何か関わらないではいけないと思いましたが、どうでしょう？

(* -江戸川大学隈本氏の資料より引用)

